

6ヶ月

～父と娘の最期の時間～

岩佐 淑子



はじめに

北海道との出会いは、私が小学校 5 年生の春。

父の転勤で大阪から札幌市豊平区(現在の清田区)に引っ越してきました。

3 月の末の札幌はまだ雪深く、今でこそ「清田族」という言葉があるそうですが、当時は新興住宅街途上で地下鉄もまだなく、最寄りのバス停とスーパーまで徒歩 20 分超、転校先の札幌市立大谷地小学校までは子供の足で徒歩 35 分。

大阪のアベノという大変便利な繁華街から来た岩佐一家はあまりの環境の違いに驚きながらも札幌での生活をスタートさせました。

赴任期間 3 年の約束で・・・。

今でこそ北海道の人にとって大阪は特にお笑いブーム等で身近な存在になっていますが、当時は「内地」で「しかも大阪」はひどいマイナスのイメージを持たれていたように思います。

「セコイ」「がめつい」「ガラが悪い」・・・

実際、近所の方々が「内地から来た人がいるんだって。大阪から」「えー大阪の人?!」と不愉快そうに話してした姿は子供心に深く刻み込まれました。

「大阪では”こんにちは”の代りにもうかりまっか? っていうんでしょ?」
と何度真顔で聞かれたかわかりません。

札幌市立大谷地小学校に転入した私に待っていたのは「異星人」でも見るかのような好奇の目でした。

女子の友人はすぐに出来ました、男子には「大阪弁しゃべってみろ！」から始まってイジワルされました。掃除で掃き集めたごみをかけられたこともありました。

小学校5・6年は大阪弁を馬鹿にされるのが嫌で、かなり無口な子供だったと思います。

もう一つの苦痛は「スキー」。

雪を見たこともない私は当然スキーとは無縁。

冬の体育の授業がスキーなので逃れようがありません。

もう一人東京から転校してきた男の子と2人で別メニューでした。

「なんでこんな寒い中、重たいスキーを担いで体育の授業をするのか」不思議でした。

ちなみに人並みに滑ることが出来るようになった今でも自ら好んでスキーに行くことはありません。大木に激突したトマウマです。

日々の生活で一番頭を悩ませたのは北海道弁です。

「コワイ」「ごみ投げ」「はんかくさい」「あずましくない」「おぼんです」「手袋を履く」「蚊に食われる」「なまら」etc。

外国語を学ぶようなもので「家では大阪弁」「一歩外に出ると北海道弁」のバイリンガル生活が始まりました。

その後、札幌市立北野小学校、札幌市立東白石中学校、北海道札幌清田高等学校、北星学園大学と私の北海道生活は12年に及

んだのです。

3年の約束だった父の転勤も結局10年の北海道勤務となり、私が大学2年の時、両親は先に大阪へと戻りました。

大学卒業後、そのまま札幌に残っていた私のところへある日母から速達が届きました。

父との6ヶ月

ずーっとそばにいて思ったこと

【母からの速達】

27 年前の秋。

悪い予感はあるもの。

「お父ちゃんの癌が再発しました。手術は出来ません。先生からは3か月、もって年内と言われました。本人には言っていない」

その短い文面は今でもはっきり覚えています。

父の癌は2度目でした。

その2年ほど前、がんで胃の3/5を切除した父。

入院わずか2週間で退院し、リハビリ(体力回復や食事。少量を数回に分けて食べる等)を経て社会復帰していました。

その時点では主治医の先生からは「取れるガンはすべて取りました。がリンパに転移している可能性もいなめません」と言われていました。

どうやらその取りきれなかった癌は静かに父の体の中で生き続けていたようです。

母からの手紙を読み、私は全く迷うことなく札幌を引き上げ、大阪の実家へ戻りました。そして翌日から仕事をしている母や姉に代わり、入院中の父の付き添い生活が始まります。

【父と私】

私は父にとっても可愛がられました。

年子の姉は父との思い出はあまりないそうですが、札幌へ引っ越して以来、道内を車出張する父に同行し、夏休みには道内各地を回ったり、特に中学校くらいまではつるんでよく遊び歩いていました。高校時代にはパチンコに連れて行かれたり、居酒屋に連れて行かれたりです。

男の子がいなかったのも、私に息子っぽい感覚も持っていたのでしょう。

父親の教育方針も当時としては珍しく(?)「女の子でも学歴は必要」と同級生の大半が短大や専門学校に進む中、4年制大学に喜んで進学させてくれました。また、スポーツが得意な姉にはその道へと、昭和1ケタにしては頭の柔らかい人でした。

岩佐家でしばしば騒動になっていたのは、父が今で言う「超イケメン」だったので、常に女性の影があり、よく母と揉めていました。

子供心に「またお父ちゃん浮気したんやな～」と。

女性からもらったプレゼントを得意げに娘に見せびらかす父親も珍しいと思います。

今は天国へ逝った父ですが、一番喜ぶお供えは綺麗な女性だと思っています。高級なお菓子やお花ではなく、綺麗な女性に手を合わせてもらうことが一番のお供えでしょう。

父の葬儀で親戚のおばさんが「“色男、カネと力は無かりけり”を地でいった人やった」と声をかけられました。
名誉なんだか不名誉なんだか。

【入院生活 病院での日常】

病院は完全看護で、本来 1 日中の付き添いは禁止されているのですが、事情を知ってか、それとも口うるさい患者であるだろう父をおとなしくするためか何も言われることなく、1 日中父の横で過ごす生活が始まりました。

「あの看護師さんは愛想悪い」「あの看護師さんはへたくそや」等々かなりうるさいオッサン患者であったに違いありません。そんな父も付き添いが始まってからは看護師さんに毒づくことはなくなりました。

病院での看病といっても特になにもすることはなく、日課は洗濯物の交換と髭剃り。

入院中の病人とはいえ、父には「男前」でいてほしかったから、剃刀で毎日髭そりをしてました、おかげで散髪屋さん顔負けの腕前になりましたよ。

毎日 10 時間以上ずーっと横にいるのですから、会話のネタもつき、ほとんどはただ二人でいるだけの時間でした。

入院中の父のお楽しみは「時刻表」と「週刊現代」。

「時刻表」はあちこちに行った気分になるそうでよくわかるのですがなぜ「週刊現代」かはいまだに疑問です。「週刊文春」でも「週刊新潮」でも「週刊朝日」でもなく「週刊現代」Only でした。

【入院初期】

付き添いを始めた頃の父は起き上がったり、ゆっくりながらも歩け、看護師さんの手を借りて入浴もしていました。

痛がることも苦しむこともなく、物が食べられず痩せてきて体力が落ちているものの全く普通。

腹部の癌が大きくなっていたため食べ物が胃を通過せず絶食で栄養はすべて点滴。そして胃にたまったものを吸いだす為、鼻から胃にはチューブです。

残酷なようですが、私は父の横で毎日わざと食事をするようにしました。食べられない病人の横で・・・ひどいことです。

でもそれを見て「食欲」を持ってほしかったから、早く元気になって美味しいものを食べたいって思ってほしかったから。

そんな思いが通じてか、父は、あれが食べたい、これが食べたいと言うようになりました。(ある日「ボガードが食べたい」と。アボガドの事でした。。。でも正解は「マンゴー」だったようです)

そして食べた後は胃の内容物をすべてチューブで吸いだしなければならず、私はいつの間にか「チューブ吸出しの達人」になっていました。

その頃からでしょうか。

「退院したら黒門市場にフグを買いに行く」が父の口癖になっていました。

付き添いを始めて3か月くらいの頃(余命宣告ではそろそろ終わりの時期)、父はとても元気になりました。イキイキしてきたというか、気力がみなぎっていて、すべて吸い出すとはいえ食欲も旺盛。退院したらあれをしたい、これをしたい、あそこへ行きたい、とこれからも希望を持っていました。

病院のしきたりも観察していたようで、「ナースステーションに近い部屋ほど危ない」だの「顔色は健康のパロメーターにならない」だの「なんでワシの名札が黄色やねん！」だの病院あるある豆知識を色々教えてくれました。

その様子を知った主治医の先生からの申し出で再検査が行われました。

「この時期にこの状態の良さ、元気さは考えられない、もしかしたら癌が小さくなっていつているのかもしれない！検査して確かめさせてくれ！」と。

わずかな望みを持ったものの、検査結果は落胆以外の何ものでもなく、良くなるどころか病状自体は悪化しており、主治医の先生曰く「気持ちの持ちよう以外のなにものでもない」。

今でもはっきり思い出す光景。

毎朝 8:30 に病室に行く私を父は首を長〜くして待っていました。ある日、ベッド周りのカーテンを開けると「待ってたで！恋人を待つような気分やで」と満面の笑みの父がいました。

あの朝の父の笑顔はいまでもはっきりと覚えています。

余命宣告の3か月を元気いっぱいにご過ごした父。

無事に新年を迎え、その頃の父の心配事はただ一つ「運転免許更新」。

2月が誕生日の為、更新案内が来ていたのですが、当然手続きに行けません。またこればかりは代理人でもダメです。

父がまたハンドルを握る日が来ますように！の祈りを込めて試験場に問い合わせをして、大変丁寧にご対応いただいたのを思っています。「退院したらこうしてああして手続きできるから」と父に伝えるととても安心した様子で最大の懸念事項は払拭されたようでした。

【進行 そして最期への階段】

2月の誕生日を過ぎた頃からでしょうか？

一気に体力が衰え、病状は悪化してきました。

寝ている(朦朧としている)時間が長くなってきます。

寝ている父は夢でも見ているのか、よく口を動かす動作をしていました。何かを食べているんです、夢の中で。絶食3か月以上、いろんな食べたい、飲みたい。それが無意識に動作に現れていたのでしょうか。見ているのが辛かった。

もうその頃になると、ベッドから起き上がることもままならない状態です。

家族が主治医の先生にお願いしたことは「とにかく痛みがないように。苦しまないように」の1点でした。

そして「モルヒネ」が投与され始めました。

弱りながらも、死に向かっているとは夢にも思っていないだろう父に薬が増える度、チューブが増える度に、「これは〇〇」と適当にかわさなければならず心中苦しいものがありました。

症状が悪化していくと、身体的不快な症状も出てきて、処置の回数が増え、その間は病室を出て廊下で待っているのですが、1度だけこらえきれず泣いたことがあります。

父が退院するまでは絶対に泣かない！と決めていましたが、父のあ

まりに苦しそうな嗚咽を聞いたときに、最初で最後、こらえきれず涙があふれました。

モルヒネの投与量・回数が日に日に増え幻覚症状が出始めました。白目をむいたり、うわごとを言ったり、寝ているのか起きているのか、意識が混濁している・・・そんな日々が来ました。

家族にとって癌の末期は辛いです。本当につらいです。厳しすぎる現実です。

恰幅の良かったまだ 54 歳の父親が痩せ細り、良くしゃべる面白いイケメンオッサンが笑うこともしゃべることもなく、意識混濁で横たわっている姿を毎日見続けるのは。

何度泣きそうになったかわかりません。

時々「看病疲れの殺人」がありますが、魔が差すのがわかりました。

「癌で苦しんで苦しんで苦しんで命を落とすなら、私の手で殺された方がお父ちゃんは幸せなんじゃないか？」と思ったことも何度かあります。

わたしが看病に疲れた、というのではなく、父をこれ以上癌なんかで苦しめたくないという思いです。私の手にかかったほうが幸せな最期なのではないかと。

そんな思いを踏み留めさせたのは父との約束「退院したら一緒に黒門市場にフグを買いに行こう」でした。

【最期の時】

何百回「奇跡」を祈ったかわかりません。

「モルヒネ」が限界量に近づいたころには、腹水もたまり黄疸も出て、意識不明となった父は個室へと移されました。

いつ何が起こってもおかしくない状態。

その個室からとつてもきれいな夜景が見えたことだけをなぜか鮮明に覚えています。

そして2日後、母と娘2人に看取られ父は息を引き取りました。

半年間の付き添いの間1日も欠かしたことのない髭剃り。

まだ温かい父のほほに剃刀をあて、最後の髭剃りをし、私の6ヶ月は終わりました。

享年54歳。若すぎます。

自分がその歳に近づいた今、特にそう感じています。

2人の娘の花嫁姿を見ることなく、まだまだやりたいこともたくさんあったらうに…

主治医の先生のたつての希望で、父の解剖が行われました。

なぜ半年も命がつけられたのか、なぜここまで頑張れたのかを知りたいとの申し出でした。

「今後の役に立てるのなら」と渋る母を説得し、姉と私は同意しました。

解剖後、主治医の先生より「あの状態で半年も、しかも一時はとても元気に過ごせたのは信じられない。医学的にはあり得ない。毎日付き添った娘さんの力以外の何物でもありませんね。お父さんも娘さんも本当に良く頑張られました」の言葉に少しだけ救われた気がしました。

父のうわごとのようにつぶやいた最後の言葉「家に帰りたい」。
やっと、半年ぶりの帰宅が出来ました。

【今でも思うこと】

どうして父は私には何も聞かなかったのだろうか？
私が付き添いするまで、母や姉には、頻繁にがんの再発や余命の事を聞いていたそうです。「もう癌であかんねんやろ？」「余命どれくらいか教えてくれ」と。
でも私には最後の最後まで一度も尋ねることをしなかった父。
なぜ私には何も聞かなかったの？お父ちゃん。

父の死から 27 年経っても私は未だにその死を乗り越えられないでいます。
父の入院していた病院には近づくことさえ出来ないし、他の病院でも病室には入ることができません。

不謹慎かもしれませんが、私が死ぬときは父と同じ「胃がん」で死にたいと思っています。
6 か月間父に付き添い、私が父にしてあげたことはあれで正解だったのか、十分だったのか・・・それを身を持って確認したいのです。

お父ちゃん、私はまだ「黒門市場」に行けずにいます。

【最後に】

医学は飛躍的に発展し、現代では癌によっては予防できる病気になりつつあり、また死に直結した病気ではありません。

今、癌と戦っている皆さま、一番つらいのはご本人です。
でもご家族も同じように戦っています。あなたを助けるためにご家族も全力で戦っているのです。

そしてご家族の皆さま、どうしたらいいのかわからない、希望が持てない、悲しい、苦しい、つらい。
でもご家族の存在こそが患者さんにとって一番の力なのです。希望なのです。

ありきたりな言葉ですが、どうぞ力を合せて困難に立ち向かっていて下さい。

あとがき

私が北海道を心から愛し、足しげく北海道に通うのは、北海道が私を育ててくれたから。豊かな人生の礎を作ってくれたから。そしてまだそこに父がいるような気がしてならないから。

いずれ北海道に戻り、そして骨を埋めたい。

6ヶ月 ～父と娘の最期の時間～

2014年11月1日 初版発行

著者:岩佐 淑子

出版:らんこし作家デビュー・プロジェクト